

自己評価報告書

平成23年 5月 10日現在

機関番号：12613

研究種目：基盤研究（A）

研究期間：2008～2010

課題番号：20242015

研究課題名（和文） 「書物・出版と社会変容」研究の総合化に向けて

研究課題名（英文） “A Synthetic Study of Books, Publishing and Social Change in Japan”

研究代表者

若尾 政希 (WAKAO MASAKI)

一橋大学・大学院社会学研究科・教授

研究者番号：80210855

研究分野：日本史、近世史、思想史、文化史

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：日本史、文化史、思想史、総合史、出版文化

1. 研究計画の概要

(1) 日本近世は、日本列島において初めて商業出版が成立し、版本と写本とが流通し読まれ書写された時代である。本研究は、書物・出版と社会との相互関係の様相を追究する研究を「書物・出版と社会変容」研究と呼び、古代・中世から近現代までを射程に入れて、日本における書物・出版文化の歴史的位置を総合的に研究していこうとするものである。くわえて「書物・出版と社会変容」研究を軸にすることにより、どのような日本史像が見えてくるのか、研究の可能性を見通したい。さらに、「書物・出版と社会変容」研究が、日本史学だけでなく、広く人文諸科学研究にどのようなインパクトを与え得るのか、その可能性も追究したい。本研究の課題である。

(2) 書物・出版と社会との相互関係を解明するために、8つの研究項目班を設定して、班ごとで個別事例研究を深める。

(3) 研究項目班とは別に、9つのフィールドワーク班を設定し、専攻を異にする研究者が共同で日本各地の資料の発掘・整理を行う。

(4) 「書物・出版と社会変容」研究会を年6～8回開催する。個別の研究報告・討論に加え、研究項目班とフィールドワーク班からの成果報告も行う。

(5) 「書物・出版と社会変容」研究会を東京以外の各地に会場を移し開催する。各地の書物・出版に関心を有している研究者と交流するとともに、現代までの書物・出版文化までを視野にいれた市民向けの講演会を年に1回企画し、研究成果を社会に向けて発信する。

(6) 研究会誌『書物・出版と社会変容』を毎年2巻印刷するとともに、プロジェクト報

告書も適宜刊行する。また、研究者・学生・一般市民も対象とした、講座ものの図書や新書等を積極的に利用して、研究成果を広く発信する。

2. 研究の進捗状況

(1) 本研究では、A書物・出版と環境、B本屋・出版、C写本と刊本、D流通、E享受者・読者、F作者・思想家、G古代・中世、H班近現代の8つの班を設定し、班ごとの研究を進めるとともに、日本の出版文化をこの8つ研究視角から捉えることの是非について議論した。

(2) 全国各地でフィールドワークを行い（16の都道府県）、書物・出版研究に関わる史料を調査し、デジタルカメラで撮影した。

(3) それぞれの研究班の成果を持ち寄って、「書物・出版と社会変容」研究会を開催した。この3年間に25回の研究会（第38回～第62回）を開催した。一橋大学佐野書院を会場に行う研究会とは別の、愛知県西尾市（岩瀬文庫）、宮城県仙台市（東北大学狩野文庫）、石川県金沢市にて、研究会を開催し、地元の研究者や市民にも参加を呼びかけ、熱心な議論を行った。

(4) 一年の研究成果を取りまとめた雑誌『書物・出版と社会変容』を、3年間で6号（第5号～第10号）編集・印刷し、全国の教育・研究機関、史料保存機関に配布するとともに、一橋大学機関リポジトリで公開した。収載した論考は全部で40本、総頁は1110頁である。

(5) 雑誌『書物・出版と社会変容』とは別に、研究成果報告書として、『官立長崎師範学校の蔵書に関する報告書』（研究分担者：鈴木理恵）を印刷した。これは官立師範学校

の蔵書を扱ったはじめての画期的な研究である。

(6) 本研究の中間報告と市民への宣伝を兼ねて、『歴史評論』711号に「書物・出版と日本社会の変容」という論文を発表した。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

(理由)

この3年間、月例会を開催し続け、雑誌も年2号のペースで刊行し続けてきた。近年、日本史研究において、書物・出版を史料とする研究が注目され、盛んになってきているが、本研究はそのような研究動向の進展に大いに寄与できたと考える。

4. 今後の研究の推進方策

(1) 2010年1月に、研究計画最終年度の前年度の応募として研究課題を新規応募した。なぜなら、書物・出版と社会との相互関係の様相を解き明かす「書物・出版と社会変容」研究が、日本史研究や人文諸科学に大きな刺激を与え続けていることは確かであるが、そうした研究をさらに「深化」させるとともに、「一般化」させるために、研究計画を再構築する必要があるからである。

(2) 新規応募した研究課題は採択され、2011年度から新たに、「書物・出版と社会変容」研究の深化と一般化のために」という課題で、研究を進めることになった。この研究のキーワードは「深化」と「一般化」である。一方で「書物・出版と社会変容」を基軸とした研究をさらに深めることによって、みんなが共有できるような(あるいはたたき台にできるような)史料論や研究方法論を体系的に提示する必要がある。と、同時に、「書物・出版と社会変容」を基軸とした研究を一部の研究者だけのものとするのではなく、広く一般化するため、全国各地の研究者と研究交流する場を設定し、地域にそうした研究を根付かせていきたいと考えている。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計50件)

①若尾政希、近世前期の社会思想、宮地正人他編『新体系日本史4 政治社会思想史』山川出版社、査読無、2010、232~271頁

②杉本史子、異国・異域情報と日常世界、荒井泰典他編『日本の対外関係6 近世的社会の成熟』吉川弘文館、査読無、2010、273~290頁

③若尾政希、書物・出版と日本社会の変容、歴史評論、710号、査読有、2009、54~61頁

④山本英二、日本中近世における由緒論の総括と展望、歴史学研究、847号、査読有、2008年、2~10頁

⑤若尾政希、近世人の蔵書形成と書物の流通、日本文学、57号、査読無、2008、50~58頁

〔学会発表〕(計18件)

①柳沢昌紀、出版を前提とする戦記—『大坂物語』の場合—、軍記・語り物研究会、2011年1月23日、早稲田大学

②若尾政希、近世日本の思想史的位置、シンポジウム「比較史的にみた近世日本—東アジアの中の日本」、2010年11月25日、明治大学

③若尾政希、安藤昌益の思想形成—米・自然・飢饉—、韓国全北大学国際学術会議、2010年10月26日、全北大学(韓国)

④小池淳一、里修験と陰陽道—新出の『ホキ』の分析を中心に、日本宗教学会第68回学術大会、2009年9月12日、京都大学

⑤横田冬彦、日本近世村落社会の蔵書家たち、第2回漢文古典翻訳国際学術会議、2009年1月16日、韓国成均館大学

〔図書〕(計14件)

①若尾政希・菊池勇夫編、吉川弘文館、『<江戸>の人と身分5 覚醒する地域意識』、2010、238頁

②鈴木俊幸、平凡社、『絵草紙屋 江戸の浮世絵ショップ』、2010、262頁

③牧野和夫、和泉書院、『日本中世の説話・書物のネットワーク』、2009、492頁

④柏崎順子、太平書屋、『菅茶山遺稿』、2009、303ページ

⑤小川和也、平凡社、『牧民の思想—江戸の治者意識』、2008、390頁

〔その他〕

「書物・出版と社会変容」研究会・コミュニティ・ホームページ

(<http://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/rs/handle/10086/16282>) (一橋大学機関リポジトリ)

研究代表者若尾政希ホームページ

(<http://www.soc.hit-u.ac.jp/~wakao/index.htm>)